
愛してるって言って ケース3

I f

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛してるって言うて ケース3

【Nコード】

N7055F

【作者名】

If

【あらすじ】

彼女の病気は既に末期だった。両親がいないので、彼と医者しか見届ける者がいない病室で、彼は医者に退室してもらい、二人だけの時間を過ごす。そして、彼女が言ったわがまま。それは「愛してるって言うて」

彼女が目を開けたとき、最初に視界に入ってきたのは遠近感を失いそうなほど真つ白な病室の天井だった。

何の色気もない純白の病室には、彼女の他に彼と医者しかいなかった。

彼女に両親はいない。両親は二人とも事故で死んでしまった。

彼女の病気は既に末期であり、彼女が目を開けた時、病室にいる医師と彼を含めた全員が最後だと悟った。

「……少し、二人きりにさせてくれませんか？」

彼は医者にそう言った。医者も彼女がもう永くないと分かっているので、「……少しだけですよ」と言い残して病室を後にする。

「大丈夫か？」

彼は医者が病室から出たのを確認し、そう言いながら彼女の右手を優しく握った。

彼女を心配させないよう笑顔を浮かべる。

彼女は何も言わずに頷く。

焦点の合っていない彼女の虚ろな瞳が、彼女を一層弱々しく見せていた。

彼は右手を握るとともに、ベッドから出た彼女の髪を優しく撫でる。

「……私ね、怖い……」

彼女が発した声は決して良質ではなく、そして弱々しかった。

「死ぬのがか？」

彼は髪を撫でながら尋ねた。しかし彼女は首を弱々しく横に振る。「ううん、死ぬのは怖くないの。けど……」

「けど……？」

「コウくんと一緒にいられないのがとても怖い……」

彼女はそう言いながら握られた右手に力を入れた。これでも力い

つぱい握っているつもりなのだろう。しかし彼にはその右手からの力は微塵も感じることが出来なかった。けれども彼女の「生きたい」という意志だけは痛いほど強く感じられた。

何とかしてあげたいという気持ちがあるが彼の心を支配する。しかし彼は笑顔で手を握り、髪を撫でることしかできなかった。

彼はあまりにも無力だった。

ベッドに備え付けられている心電図の無機質な音が一定のリズムで病室に響き渡る。あまりに小さく揺れる波。しかしこれが、彼女がまだ生きているという何よりの証拠だった。

「神様って不公平だね……」

「……………」

「何で神様は幸せな二人を引き裂くんなんだろう……」

「……………」

彼は彼女の問いに何も答えることが出来なかった。答えが見つからなかったというのもあるが、それ以前に無力な自分が恨めしかった。もし自分が神様だったらと、不意にそう思った。

そう言いながら彼女は彼の瞳を見つめていた。微笑んでいたが目は決して笑ってはいない。彼女の目は潤んでいた。泣いて心配させないようにと必死に涙を堪えている。

そんな彼女の気配りが彼には充分すぎるほどよく伝わり、彼の心を痛めた。思わず目頭が熱くなった。

彼は笑顔で彼女の髪を撫でることしか出来なかった。

「……………ねえ」

「ん？」

「……………一つだけ……我がまま言ってもいい？」

彼は髪を撫でながら、笑顔で頷いて答えた。

「言ってみな」

「……………って、言って……………」

「えっ？」

「愛してるって、言って……………」

彼女の予想外の注文に彼は一瞬戸惑った表情を見せ、それを見て彼女の表情が寂しげなものに変わる。

何に対しても奥手であったな彼は付き合い始めてから今なお、彼女に「愛してる」はおるか「好きだ」とすら言ったことがなかった。（こんなことを言うのは恥ずかしい……。）

彼は一瞬そう思ったが、彼女の為に何か一つでも多くのことをしてあげたいという気持ちの方が遥かに上だった。

「……愛してる……」

少しぎこちなかったが、それでも彼女は微笑んでくれた。

「……うれ……しい……」

彼女はそう言つと、やがてゆっくりと目を閉じた。それと同時に彼女の手の力が抜け、だらりと垂れ下がる。

ベッドに備え付けられていた心電図が一定のリズムから突如平坦になり、無機質な音が病室に鳴り続いていた。

それを聞いて自然と彼の目から涙が流れ落ちた。まるで堰を切ったかのように、流れ続けた。やがてそのうちの一つが彼女の頬に落ち、綺麗な軌跡を描いて伝っていった。

まるで彼女が泣いているようだった。

「……愛してるよ……」

彼は声を震わせてもう一度呟いた。

やがて医者が病室に入り、先程から鳴り続いていた無機質な音が止んだ。

（後書き）

この作品は中学の頃に書いた小説シリーズのケース3です。長編にしてもいいのですが、当時の私はこの一シーン物にハマっていた時代でして、今のところこれを長編にするつもりはありません。なお、1と2はどこかにいつてしまいました。

テーマはタイトルの通りです。決してタイトルネーミングをサボったわけではありません。

感想の方を頂けたら幸いです。もしかしたら、他のケースを探すか、または書くかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7055f/>

愛してるって言って ケース3

2010年11月24日08時48分発行